町長室からこんにちは

No.61

一宮町長
馬淵 昌也

去る7月25日の朝、オリンピックサーフィン競技の会場に、表敬訪問に伺いました。大原洋人選手の活躍をまぶしく拝見した後、モロッコから選手の応援にいらしたスポーツ大臣とお話しさせて頂く機会を得ました。

大臣のオトマン・エル・フェルダウス氏は、4回目の来日で、以前は、産業・投資・貿易関係の大臣として来日されたそうです。モロッコは、日本の産業の力量にたいへん期待をかけており、対日関係はモロッコにとってとても重要なのだそうです。

お話しの中で特に興味深かったのは、宗教についてでした。オウム真理教の事件をよくご存知で、テロに走る危険な宗教は、イスラム教の国モロッコにも存在するとの事でした。その対策としてモロッコでは、テロリストとなった人たちのマインドコントロールを解く再教育プログラムが構築されているそうです。プログラムを終えて正気に戻った人たちは、次は自らが洗脳された人たちに対する説得役となるそうで、この仕組みは大いに効果を発揮しているとのことでした。

また、日本の宗教事情について、日本人は、特に一つの宗教の教義を守ろうとする人は少数で、神道・仏教・キリスト教などの宗教儀礼を、年中行事として行う人が多いです、と私が申し上げると、大臣は、「私の家でも、クリスマスは行っています」と仰られました。「イスラムのご家庭でも、キリスト教の祝祭を行うのですか」と伺うと、「ユダヤ教の伝統と、キリスト教の伝統は、イスラムでは、啓典の民（people of the book）といって、同じ神の信仰をもつ仲間とされています。そこで我が家では、クリスマスを行って、子供たちにその意味を詳しく説明しています。若い人に宗教のことを教えることは、彼ら彼女らが、自分も長い伝統に連なっているのだ、ということを理解するために、大事なことだと思っています」とお話しになられました。

オリンピックは、コロナ禍により、無観客という形となってしまいました。今回の表敬訪問時のモロッコの大臣とのお話を通じて、本来ならば、多くの町の皆様にこうした交流を体験して頂き、一宮町のことも外国の方々に幅広くご紹介して頂けたのに、と改めてコロナを恨めしく思った次第です。